

きぶのさと

NO.41
月刊

第七輯 人物篇 第八号
昭和廿六年十一月一日発行 (非売品)
発行所 岡山県瀬野郡吉備町東町三五字垣方
吉備 觀光協会

吉田竹陰 (その二)

秋山氏部の數十代の後ちの太郎左エ門といふものが、備中に流浪し元禄年間松山(高梁)城主水谷出羽守勝明に仕へたが、その死後其嗣勝時が國際せられたので足守藩主木下家に奉仕し代々考道の指南役を勤めた家筋である。竹陰は幼時京都に遊び井上四明に就て經史を研鑽し、又詩文にも長じていた。時に木下侯は大いに學問を奨励せられた。竹陰を登用し或は民間から秋山考朔を挙げ、子弟の教養に努めた。嘗て侯が詩を賦して竹陰に與へた詩趣をみると、その好遇にあつたことが窺はれる。侯は間もなく罪を得て卒去せられたので、竹陰は足守を去つて旅に出て、一時京阪の地へ遊歴したが再び備中の里に歸つた。レタレ定住の處がなく所々を流轉し、晩年には宮内村に隠棲し世人との交遊を絶ち、吉備の中山の景勝を愛し花晨日夕、常に瓢を腰に携げて詩を吟じ山林を逍遙するなど粗衣粗食に甘んじ外見を飾らぬ清貧の生活のうち、身を終つた。時に天保三年の冬十一月八日、年は八十一歳であつた。屍を邑の山上に埋葬したといふが、いまでは確めがた。以上は松陰の署傳であるが、思ふに竹陰の仕へた足守侯は足守藩主木下淡路守利彪の時代である。侯は古學を好み寛政四年に藩校追琢舎を開いて藩士の子弟を教養し、又民間には三餘舎の支舎を設けて多くの有能の士を輩出してゐる。医学者として有名な緒方洪庵は同藩の士である。殊に侯は自ら教訓をつくり、これを講義せしむるなど文に

教化に努められたが、前述の如くなにか幕府の忌避に融れず享和元年三十五歳の壯年で疑問の死をとげられた。この時竹陰は五十一歳であつた。このことに就いては木下家譜に詳しくみえぬが、或は嫌忌して記録に遺さなかつたものと考へられる。竹陰が足守を退去したことは利彪の突然な死に過い悲歎のあまり非常な衝動を受けた理由によるものである。

平野の唐井医院の客間に「撫孤松而盤桓 辛亥仲春 竹陰書」の扁額がかかげてある。これは寛政三年竹陰が四十一歳の春の時の筆である。これは陽春の日ざしをあげて静かな樹林中を徘徊しながら孤松を撫みて進みだしたとほる情景を叙した詩である。吉田氏の一族には自樂軒、貫堂、秀雄など多くの學者を出してゐるがその系統はゆたらない。

公森太郎

公森家の遠祖は藤原家にれてその末葉藤原中納言俊成の後裔である。俊成卿は(二一四一)壽永年中の人にして高倉天皇に仕へ皇太后の要職にあつた。当時源平の争いに連坐し平家方の宗徒の將士は悉く捕はられて斬首の刑に處せられ、或は鎌倉に護送せられ先はさられたが卿は窈々に京師を逃れて備中の地に落魄し、平田の地に隠棲し樂隱と号し元久元年二月九十歳の夭折を全うした。

卿は絶世の歌人にして権中納言藤原定家と共に「百人一首」を撰した人にして「千載和歌集」の撰者としてはあまりにも有名である。生涯を歌道に心を傾け、深更までも桐火鉢を抱いて苦吟したと傳へられ、斯道に終始した人である。家集「長秋詠藻」は独得の歌風をあらわしたも

のでその態本体は後述の歌道に一新生面をひらいたといへよう。

(千載和歌集の三首を撰んで載す)

夕されば 野辺の秋風身にしみて 鶉鳴くなり深草の里

さりともと 思ふ心も虫の収り よわりはてぬる秋の暮れかな

住みわびて 身をなくすべき山里に あまりくまなき宿半の月かな

俊成の子を俊直という。其の後五百余年を至て十三世の後裔、為俊に至り慶安三年三月その母は若くして寡婦となり一子為俊がまだ幼少であつたので生活に困窮し、為俊を連れて同国都守郡大内田村の里正森竹右エ門という人に再嫁した。しなれ竹右エ門との間に実子がなかつたので、為俊に森家を相続させ姓を始め公森氏に改め竹右エ門を襲名した。よつて為俊を公森家の始祖とするのである。

而末子孫は連綿として二百余年、七世の孫を太平孝俊という。その子ハ在仲次光俊は嘉永六年二月二日生れ大正十年二月十三日六十九歳で没した。この人が太郎正俊の父である。

太郎は男二人兄弟にして弟を三郎という。母は登良にして上道郡賦田村国府市場岩藤某の娘である。太郎は明治十五年三月二日父が三十

歳の時の生れである。不幸にして太郎が十一歳、弟が二歳になつた年に母は三十九歳で病に罹り他界したので、父は后妻として一宮村の砂田某の娘、お國を迎へたのである。

太郎は撫川の小学校を卒へて岡山中学校(いまの朝日高等学校の前身)に入学したが家貧にして學費に乏しく、朝早く草履をはいて大供まで歩き、ここで知人の家に譲けて置いた皮靴にはきかえつて通学した

という。太郎は生來頭脳明哲、常に優秀な成績を収めていたので、倉敷の篤志家大原孫三郎に瞞目せられ學費を受け第一高等学校を卒

三

へて東京帝國大学に学ぶ。首席で通じた秀才であつた。卒業後は官界

に入つて税務官となり、大蔵省に勤務し、後ち財務官に轉じて北京駐

在した。更に先輩結城豊太郎の紹介で興業銀行に入りまた擲せられ

朝鮮銀行の副總裁に就任した。後年は辞して俣里に帰り中國銀行の頭

取につぎ大いに手腕を振つた。當時中國銀行は経営不振にして困難の

日が続いたが即ちの財政に盡力し今日の中國銀行の基礎を及ためたの

はこの人である。これは大原系の銀行にして大原氏の旧恩に酬いら

たのである。日本銀行に負債のなかつたのはこの中國銀行である

と先輩明石照男は話してゐるが、實に太郎の功績によるものである。

敗戦後政界を下つて早島へ一時寓居を構へ後ち東京に移住した。そ

して晴耕雨讀の歲月を送り、或いは獵書の姿が右本屋の店頭にみられ

た。時に清子夫人に誘はれて東京枚並尾の和泉教会に入り聖書の教

も受けた。

昭和廿八年二月廿五日、七十二歳の高齡で東京枚並区和泉町のわが

筆ではあつたが晩年に少レの日記と詩文を遺し、論文又は隨筆のよう

なものはない。篆刻に、是レんだ風流人であつた。

法諡 大覚院俊学祐翁居士

遺作 萬紅窓外烟 千紫入眸明 看盡扶桑景 鷄林果奈情

魚貫羊腸路 窮峯又没叢 林泉秋已滿 長嘯落暉中

綾家買地志良田 大正十三年戊寅十月次吉谷詞契金剛山詩韻 傳翁得々撰腰邊

適災行盡幾山川 昭和十五年庚辰九月廿二日 訪傳翁有作
洗汗納涼河原泉 鬱氣滿樓更促而 飛禽時啄主人邊

國破民疲在路堅 昭和十七年壬午八月二日 於奥津河原園
羨君超脱送餘年 豈料七十駢群秀 更策文章寫々天

天地の中るきなき道あるものを 昭和丙戌 妹尾先生古稀書懷次韻
昭和丙戌 妹尾先生古稀書懷次韻

北馬南航耗壯心 昭和廿一年九月廿五日 曉
放山避世舊情深 九皋吟社初陪夕 春水春風解憂襟

老婦故園十年空 昭和廿四年二月 東京所感
復慕兒孫耘海東 焦土家稀人喘々 衰翁徒冀再興風

枚並の焼野か原に残る家の 軒端に薫る梅の一本

覇旅都塵裏 西國歲序新 春山千里遠 風送早楸句
昭和庚寅 針正 八廿五年

風流相凜市林仙 昭和庚寅四月廿日 輓高草平助翁
皓淡互誇五十年 豈料落花微雨夕 傷心對計淡潯然

年毎に老、行く身とは知りながら 在のざわめきに忘れつるかな
昭和廿五年十二月廿一日 歲晚所感

うらぶれもなかなか安し一年を 門閉ぢて過ぎし大晦日かな
朝な夕な古今東西の文ときて 暮し、今年名残惜しくも

基督教會に一年通いで 一年も聖の言葉聴きなから またとけやらぬ幸の薄さよ
この句は岡山を去つて東京に住まへれた、昭和廿五、六年頃の作
で太郎が六十八、九歳の時である。若い時から神佛に対する信仰の
念が薄かつたようである。中学校時代に無神論を語つたのは有名で
ある。しかし先祖に対しては崇拜の念が厚く、檀那寺の千手寺に墓
参の際には必ず供養料として若干を納めていた。嚴父仲次の時は左の
覚書を渡してゐる。

覚書

一、金 巷百内也 右之全員 清冷院義深金剛居士 供養之為寄附致候也
大正拾年三月五日 公森太郎 (印)

千手寺の位眼は相照和尚の時代にレて、和尚に向つて佛教の講演を幾
度も聞いたが、どうも信仰の心が起らなかつた。御佛に合掌する気持には
なれなかつたが、弘法大師の行狀記を讀んでどうやらその道に入れる
やうになつた。と語つたといふことである。

逐身五歳隱仙居 放浪呻吟萬事虛 雖有省思如夢幻 衰翁依舊詭殘書
昭和辛卯八月初二奉酬山濤先生被寄賀次韻

風雲窮達不能遷 守節鞠窮五十年 今日榮冠何偶再 庶幾天福更蕪子
昭和辛卯八月奉祝高橋翁永年勤続表彰之典

○ 履歷書 (参考のためその履歷を載す) 本籍地 岡山県都窪郡吉備町大字大内田五一番地

現住所 岡山市門田屋敷二一〇番地

岡山県平民

明治四一、七 東京帝國大学法科

大学政治学科卒業

〇七、二〇 任大蔵属 給五級俸

主務局、大臣官房文書課

勤務

〇二、文官高等試験合格

〇四、二、五 叙高等官七等、四級俸

(署)

〇四、三、七 任稅務監督官、叙高等官

七等(俸給令改正)

〇〇、札幌稅務監督局在勤

(署)

〇三、三、六 任稅務監督局副稅部

長

〇二、三、九 青島守備軍司令部附

〇五、七、三 石島稅務監督局直稅部

長

〇三、三、八 大阪稅務監督局間稅部

長

〇七、三、五 支那へ出張

〇八、三、三 石島稅務監督局經理部

長

公森太郎 明治十五年三月六日生

〇三、三、三 陸軍高等官四等、二級俸

(署)

〇八、九、一六 任大蔵事務官、支那駐在

支那公使館附

〇一〇、二、三〇 叙勲四等授瑞宝章

〇三、六、三 兼任專使局参事

〇一三、三、七 改米各回出張

昭和三、八 勅任官待過

〇四、三、三〇 叙勲三等授瑞宝章

〇四、三、三 任海外駐劄財務官、叙高等官二等

〇〇、〇、〇 支那駐在、上海南京九江漢口へ出張

〇五、八、三 任顧問本官、株式会社日本興業

銀行理事

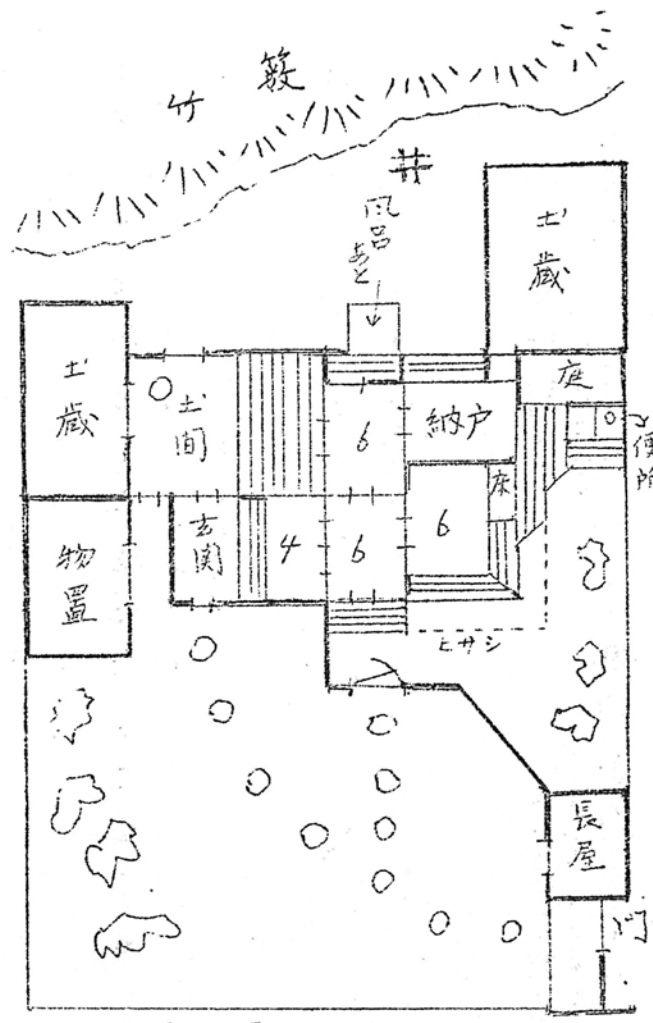
〇三、四、一 朝鮮銀行副總裁

〇一五、一、三 中國銀行取締役頭取

〇二四、三、〇 同退任

以上

〇太即の弟、三郎は兄をたよつて上京し、勲学中病に冒かされ、二十七日で逝去し、郷里には父親と右妻の二人が農業を営んでいたが、太即が四十歳の時に、父は六十九歳で没した。お國との間に実子がなく、淋しく



公森太郎生家見取圖

石垣 (6帖当1.818米)

孤園をまもり、家道を継いでいたが、太郎は歳次墓参を怠らな母の面倒をよくみた。昭和十八年の十一月十九日、八十五歳で他界した。太郎の生家は南向に建て、一段高の所にある。藁葺屋根は荒れ果るまでに存にの修繕も加へられ、いらない。客間に板倉氏の定紋三ツ巴左廻りを配し、巨材を用いて、このことは登藩後邸内にあつた城門の一部を譲り受け、建てたもので、本屋との不釣合が窺見せられる。

○

公森家の子孫は天和二年以後公森竹右エ門からわかれて、数派になつたが、代々この地の庄屋格であつた。頃には多くの土地を所有し、召使男女六、七人を抱えて全盛時代であつた。撫川領主戸川氏或は備前藩主池田氏の老瀧川氏などの來訪あり。その頃大田村は倉敷代官の支配を受け、天保年間戸川氏から御用金の申付などあり。左屋公森竹右エ門の一族、仲造、庄次郎、右エ門、長谷川吉兵衛の分家は銀五貫目を差出し、三ツ重の本益を賜はつた。其の後、庄次郎系は家財田畑

A

晨二 空俊院清全法道居士
昭和廿九年八月十二日死

謹一 上正九斗生

憲嗣
琢磨

B

妻 家興 下在村 山崎巖の姉
六十三才

妻 美美子
上島市黒崎中野陽一郎の姉

嗣居士

大徳院貞阿淨心信士 — 太平孝俊 山田の梅林に碑を建つ

明治十八年十月一日死

連善院梅慈徳藏居士
明治四十一年六月十七日死

仲次 光俊 六十九才
吉原永六年二月廿日生

妻 法老院貞室妙心信女
文化二年二月十四日死

妻 連照院親月俊清大姉
明治廿五年八月十四日死 七十才

妻 登良 忠崎氏の女
大正十年三月十三日死

傳作 教平 明治四十年生 — 教 昭和十九年生

清淨院知照育俊
信女 明治廿五年四月廿
八日死 四十九才

仲次

太郎 正俊 大覚院俊学松翁居士 七十才
明治十五年三月二日生 昭和廿八年二月五日死

妻 清子 佐藤氏の女
大智院秀鳳貞範大姉
明治廿二年六月四日生

三郎 明治廿四年六月十三日生 大正六年三月三日死 二十七才

俊郎 愛京大学卒業三和銀行に勤む (在東京)

稚子

勝子

文子

次郎

華子

この地に白三太后といふ小字がある。
此は大蔵坊址に公森家の遠祖皇
太后大夫藤原中納言俊成卿を祭る
一小祠がある處から、起つた地名
である。

C

松吉 良哲 義信士
明治六年十月廿九日死

松次郎 白玉院紫雲自得信士
明治四十二年八月十六日死

熊太郎 大正十二年二月六
日死 老輝院 篤義

妻 玉雲 見道信女
弘化四年十月九日死

妻 仲 知玉院来雲妙得信女
大正二年五月廿三日死

妻 千代 昭和十四年十月
廿日死 老台院 茲室貞
全信女

猪太郎 子 禪香
明治廿二年十月五日生

清雄 養子
昭和九年四月廿七日生

大隆院高顯 謀善居士

妻 和子 昭和十六年一月二日生

妻 小植 明治廿六年九月九日生

靖治 昭和廿五年五月十九日死 島マニラ
東方神力山方面に 葬 年四才

大泉院秀繁 貞範大姉

大乾院壯烈 宥 起居士

岩雄 明治四十年生 (分家)

桂月院白蓮 貞芳大姉
八おわり) この取末完

野崎 出身

株式会社 野崎 杖木店

岡山市下西山町八九

取締役 野崎秀雄

トモ工葬儀社

吉備町平野国道筋

電話吉備局四四番